

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成二十一年三月一日発行
通巻一〇一五号(毎月一回一日発行)

京鹿子



3月号

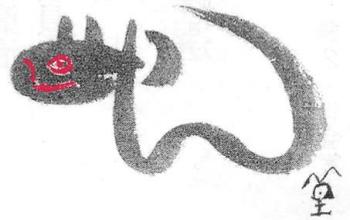
初鏡
丸山佳子

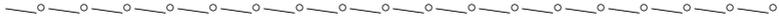
寒波襲来それほどでない空腹感

枯れ山にない物ねだりして戻り

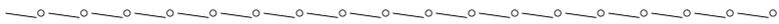
憧れのうすれに気づく実南天

喜捨をして鞆の中へ新暦





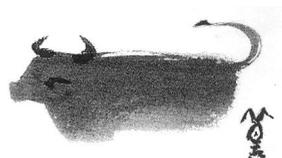
鳩われも同じ白息けふ大安
咳をしても他言は無用遺産の寺
見て聞いて欲しい物なし佐保姫待つ
五個荘晴れ冬將軍はいまどこに
まだ女であるに見直す初鏡
ふり返へることも大事と枯樹撫づ

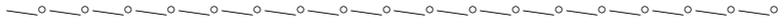


豊 田 都 峰

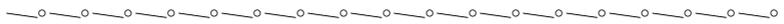
清響集 その九十五

行 去 年 の 残 す 雑 多 を か ぞ へ も し
歳 晩 に 急 げ ば 透 明 と な り か ね ず
わ が 恵 方 明 け そ め て 一 山 を 得 る
初 山 河 そ の ま ま 比 叡 の 大 三 角
ま ゆ だ ま や 十 三 や と て 櫛 老 舗
ひ かり ゆ く 沖 の 一 鳥 義 仲 忌





かけらめくものも一品初弘法
寒林の奥処は朱の神のみ座
めつむりて大鷲檻の天の座に
寒日の獣園遠き一吼のみ
凍鶴やいつも真中に立つごとし
寒林のたしかな影は磴めきて
雨だれのまどほのままに春めける
茅葺の里山芽吹く雨ひと日



秀華採集

花野来てあしたの視野に遊ぶかな

直江裕子

「花野」の場がプラスに働き、明日への視野にいちだんの広がりを与え、さらに「遊ぶかな」が広がりを与える。全般にあるゆとりもよい。

夫よ子よ召されし人よ寒満月

森道子

着ぶくれてピカソの裸婦を見てをりぬ

森洋子

ともに中七の展開がよい。前句の身近から多くの人へ、後句の「着ぶくれ」から裸婦への展開に注目した。「寒満月」のあしらいもよい。

鈴鹿 仁

寒園

寒園のけものの叫び宙広し
背伸びして麒麟と咄す冬ぬくし
寒猿の主従の掟檻の中
矛杉の私語のうるほひ春近し
寒の雨苦言を呈す町がらす
朝凍^{じみ}やこころの眞中透き通る
洒落風^{ふう}のきかす人ゐて草城忌

近詠

宇都宮滴水

水の月

こぼれ月音背負ひゆく機通り
たなばたや指の十本多すぎる
水の月壊し切れずに独り占む
大声で呼ぶもいとほし雨月の灯
月満ちて橋のまん中狭すぎる
犬も入れ月の宴の人となる
窓の月目路に誘ひてダンスの輪

神麓集



藏王山 新関 一杜

大小の樹水の針が天を刺す
 まだ冬の浪には音のなかりけり
 小さきが先づ走りそむ雛流し
 樹々の間の海模糊として春遠し
 シヤボン玉天々天まで春近し

宇治十帖 林 日 圓

宇治十帖希代の才女初つばめ
 囀や宇治十帖のミュージアム
 いく百の和歌を詠みこみ風光る
 紫のゆかりふたたびちとせ春
 千年紀気運高めて百千鳥

会津 北村 香朗

前景は小菅刑務所雪の富士
 紅葉山縫ふ一輛の水郡線
 鶴ヶ城濠の紅葉の遅速かな
 白虎隊土を偲ぶ切虎落笛
 菊の香や家老屋敷の部屋構

着ぶくれ 藤岡紫水

車座の芯に煮えたつ鮫鱈鍋
 熱爛や今日のいのちは今日限り
 着ぶくれて命の種火守りをり
 着ぶくれのものみなまとめ露天風呂
 鮎にも安らぐ日あり湖の荒れ

野風呂岬 和田 照海

野風呂岬鷹の渡りの尖り浪
 へそ島へ日矢幾たびの小春かな
 綿虫やかかつて遊女の港町
 ひとときは紅葉明かりの遊女墓
 石鎚を手廂にして島小春

松田都 青

困や私の挽歌持ち去りし
 写経して秋の愁ひの声を消す
 揺れるのを拒むコスモスある日暮
 多病なる医師を主治医に秋を病む
 満願の一つ手前の時雨かな

神麓集



佳き目覚得たり元旦明烏
 牛の背に年を重ねし初夢ぞ
 大事かな四日遅れの初詣
 間違ひと答へて切るる初電話
 今年またそこばく増えて年賀状

高木 智

山笑ふ 竹貫 示虹
 合流の力満ちたり山笑ふ
 山国の道は川沿ひ鳥帰る
 涅槃図の百足虫の足の百嘆く
 啓蟄やつひには帰る地のほひ
 芽吹く山一人で生くる覚悟せむ

膝掛は好みの柄よ読みすすむ
 いつよりか右の手袋はめぬ癖
 抽出に記憶とぢこめ年送る
 短日の日々の献立迷ひをり
 迂曲り木犀の香の新しく

船越 美喜

直感の狂ひまざまざそぞろ寒
 過去よりもこれからの事年詰る
 鍋奉行自認してゐる夜の木枯し
 極月の芝居を囃す木遣唄
 枯木坂眞つ只中の孤影かな

木遣唄 北川 孝子

火を孕むをんな想念枯れるまで
 大落暉枯草の穂に飛火せり
 何色で塗ろう無色の枯母郷
 枯はげし本家分家と争へり
 枯の道昨日の自分がよく見える

枯 柴田 朱美

藪ぼとけ異界の黄葉に泣き笑ひ
 黄葉しぐれ羅漢も寄らむ野風呂句座
 黄葉しぐれ百木百草百羅漢
 掛けたてはラインダンスや白大根
 独りの夜しんしんと煮ゆ豆腐鍋

黄葉しぐれ 萩野 千枝



京鹿子集

豊田都峰選

千葉 直江 裕子

着ぶくれてピカソの裸婦を見てをりぬ 大津 森 洋子

小春日のガラスいちまい感光す
歯をあてて結び目ほどく十三夜

一瞬の日差輝く枯野かな

黄落の例へば爪を切るやうな

それぞれの違ふ短日もて集ふ

枯れながら蠅の目の攻めてをり

空白は空白ならず日記果つ

花野きてあしたの視野に遊ぶかな

冬帝を仰ぎいとしむわが命

寒月光ひと棟残る隅やぐら

八木 森 道子

ちやんちやんこ寸暇を惜しむ翻訳家 五十子 伊吹 之博

夫よ子よ召されし人よ寒満月

冬休みフライトを待つ留学生

木の葉髪なげつけ背のぼし生きめやも

パーティーが済めば家族と冬休暇

我が家より近き村墓枇杷の花

久々の日本に着けば息白し

逝きし日も遠くなる日々大根炊く

風花や来し道語るマレー医師